

第 19 回日本ボランティア学習学会第 4 分科会



1 テーマとねらい

「ボランティアでつながる地域・家庭・学校～地域のみんがボランティア～」
◎「開かれた学校」「地域の教育力」などと言われている。地域から差し伸べられている「手」をがっちりつかみきれていない学校。学校が開いている「窓」が見えない地域。そして、置き去りにされていく家庭。「ボランティア」をキーワードに繋ぎ変えることを考える。

2 分科会の概要

3つの団体の事例報告を中心に、地域の力が子どもたちと学校を支えていく活動について話し合った。

【事例報告 1】「しもうまタごはん会・いっしょに食べよ」の活動

山内聡氏（世田谷地域障害者支援センター）

2つの活動は、地域のさまざまな人が「食」の場を共有することで、それぞれが自然に自分の「役割」を意識し、顔見知りの関係になり、「つながり」が生まれる。互いが「助ける」「助けられる」の隔てなくゆるやかに繋がる場が子どもたちを育てている。

【事例報告 2】横浜市立東山田中学校区学校支援地域本部（やまたろう本部）

大淵順嗣氏（学校・地域コーディネーター・学校運営協議会委員）

深澤純子氏（学校・地域コーディネーター）

地域が学校やそこで学ぶ子どもたちをサポートする仕組みが組織的に運営されている活動。肥大化する一方の「学校の役割」。疲弊する学校を地域で支える。その中には「キャリア教育」「学校間の連携」さまざまな形の「学習支援」など、学校が果たしきれない役割を

「やまたろう本部」が、学校の要請により支援する、また、時には支援プログラムを提案して推進していく。転勤したての先生の「ちょっと面倒な学校に来てしまった」という感想が、いつの間にか「助かる！ありがたい！」へと変わるそうだ。学校が「開かれる」ことで、教職員が子どもたちに向き合う余裕ができ、子どもたちが生き生きと学校生活を送る。このような活動がもっと広がるために私たちがすべきことを考えさせられる発表であった。

【事例報告 3】NPO 法人あだち学習支援ボランティア「楽学の会」

早坂津夜子氏（「楽学の会」前代表理事）

「楽学の会」は地域の中で区民の学びの場をつくる活動が元になっている。「あ

「だち区民大学塾」では、区民ボランティア講師や連携する地域の大学との連携講座など多くの学びの場を提供してきた。そのノウハウを「学校支援ボランティア活動」に活かしていく活動へと広がってきている。大学生の「ロボット講座」や、地域のさまざまな学びのための資源が子どもたちへ繋がっていく。活動の原動力は子どもたちの成長を見ることである。

事例発表を受けて、このような活動を広げるために必要なことを話し合った。3つの活動に共通しているのは、地域のボランティアがそれぞれの地域の状況に合わせて地域の力を地域の学校に提供していること。それぞれの活動は少しずつの気づきを形にして、人がつながる「場」を持ち、参加する楽しさを味わいながらの活動である。

地域が学校と連携する際には、学校のニーズを知り、子どもたちのためになることを考え、話し合うことが大切である。また、活動を継続し推進していく上で広報活動や活動資金について考えることや、担い手のボランティアやコーディネーターの人材育成も必要になる。

これからの地域と学校のあり方について学びの多い分科会になった。

(神奈川県立鎌倉高校 大坪直子)

